令和３年度　「土砂災害防止に関する絵画・作文」作文中学生の部 優秀賞（事務次官賞）

「　日常の中で防災意識を持つには　」

埼玉県　私立武南中学校　１年　小田垣（おだがき）　奏未（かなみ）

最近、テレビで水害や土砂災害の警戒情報を見る機会が年々多くなってきているように感じる。温暖化の影響によるゲリラ豪雨の緊急速報は、年々、聞くようになった。そして、その地域に住む人たちは、どの様に防災を心がければよいのだろうか。防災意識を持つには、何をすればよいのかを考えていきたい。

日本は世界の中でも災害が多い国と言われている。地震、火山、台風、洪水をはじめ、これらが引き起こした土石流・地すべり・がけくずれなどの土砂災害が毎年、発生している。日本そのものの地形、地質、気象などの自然条件が原因といえよう。そもそも、日本は全土の約６割が山地であり、平地が少ないため、山を切り崩した場所や、谷川の近くに住宅街を作っている。

私の住まいは東京都北区にある。東京の平野部に住んでいると、山や谷が近くにないので土砂災害にあうことはないだろうと思っていた。しかし、東京の平野部でも地名に「山」や「谷」という名前が付いている地域は、昔山や谷であった名残りと言われる。人間の手で土地を削ったり、埋め立てたりして、今の街になったということである。そのような場所では、がけ崩れが起きることはないが、地盤沈下や液状化現象、浸水などが過去に実際に起きている。

また、日本では大雨による土砂災害の被害が多い。日本は、四季折々の景色が楽しめる国ではあるが、世界の中でも降水量の多い国である。最近、心に残った土砂災害は７月３日に静岡県で発生した熱海伊豆山地区の土石流である。静岡県災害対策本部の報道発表（第 46 報）によると、土石流により被災した範囲は、延長約１㎞、最大幅約 120ｍにわたったとのことで、24 名が死亡、今なお３名の方が行方不明となっている。また、避難者は 184 名、被害棟数は 128 棟（135 世帯）とのことであった（令和３年８月 22 日時点）。この土砂災害では、自分と年の違い女子高校生も１名亡くなっていると思うと、いたたまれない気持ちになる。

このニュースの被災地近くの高齢者の方へのインタビューで「土石流が来る少し前に、山から茶色い水が流れてきた。いつもと違った」と言う。でも避難はしなかったそうだ。このように、長年、同じ場所に住んでいる人は「長年住んでいるが、今まで災害が起こったことはない」、「ここは地盤が固いから大丈夫」と言って避難をしたがらない傾向がある。土砂災害の警戒情報が出されていたのにもかかわらず、避難しないという背景には「ここは大きな災害は起こらないだろう」という思い込みがあるからではなかろうか。

一方、テレビ速報や携帯電話の防災速報などが速やかに発信されている。また、スーパーコンピュータによる気象予測など年々、危険な状況を知らせる情報はより詳細に、より迅速に発信されるようになった。しかし、危険を知らせる情報がいくら早く発信されても、受け手である人々が、自分の身に大きな危険が迫っていると感じない人が多いように思う。確かに過去には、予測ほどではなかったこともあった。それは、予測が外れたということだが、大げさに感じることは防災の上で一番大事である。

これかの自分の身に一体何か起きるのかと不安をすぐに感じることこそ、防災の第一歩と思う。ハザードマップ、過去の被害状況、災害時の避難場所、緊急時の連絡方法、防災グッズの用意、防災訓練への参加など日常の中で防災の意識を高めていくことである。さらに冷静に行動できるように、自分の身の回りで起こりうる災害を再認識し、目前に迫った場合にはどう行動するべきかシミュレーションをし、頭の中での準備もしっかりと行っておくことも必要と考える。